



Germany
South Korea
United States
Finland
Sweden
India
Norway
France
Taiwan
Poland
Canada
Madagascar

Tanzania
China
Republic of Uganda
Malaysia
Thailand
Laos
Niger
Kenya
Zambia
United Arab Emirates
Pakistan

大学院教育支援機構 (DoGS)
海外渡航助成金

— 2024. vol 2 —

助成金額 ▶ 一人当たり 最大**40**万円

京都大学大学院教育支援機構では、大学院教育のグローバル化を目的として、本学の大学院生がフィールド調査や国際学会での研究発表、海外での共同研究、海外の研究室で研究指導を受ける等の目的で海外へ渡航するにあたり、一人あたり最大40万円を奨学金として支援します。



01 文学研究科
行動文化学専攻 博士後期課程1年

鄭怡

計画名 中国農村部におけるジェンダー秩序の変遷に関する質的調査
渡航国 中国



「パーソナル・イズ・ポリティカル」——社会学質的調査の力——

本助成金の支援を受けて中国に渡航し、3ヶ月間の充実した質的調査を実施することができました。博士後期課程では、農村部から都市部への一時的な教育移住「陪読」に着目することで、「男女平等」を掲げ社会主義建設を経験した中国では、農村部でも男女の性別役割分業が開始され、ヨーロッパや日本に遅れて逆戻り的な「再主婦化」を経験しはじめているのかを考察し、未開拓のこの分野への関心を喚起する予定です。今回の渡航を通して、現代中国農村部におけるジェンダー秩序の変遷が一部浮き彫りになりました。都市部へ教育移住する農村家庭は多くの場合、夫は外・妻は内、プライバシー意識の発覚と強化、子ども中心主義などといった要素を備え、「近代家族」的にみえてきています。しかし、経済力とつたような影響要素で、農村家庭は完全に「近代家族」化を経験していないことがわかりました。今後は国家の政策と経済的リベラリズムによってもたらされた都市・農村間の格差を考慮に入れ、中国全体のジェンダー秩序の再編過程をより包括的に把握する予定です。

国際的な知識の拡充と研究環境への挑戦。 世界に羽ばたく8名の大学院生の体験談を紹介します。

現地調査だからこそ得られた成果

本助成金の支援を受け、私はインドに渡航しました。渡航目的は、現地でのみ入手可能な文献を収集すること、現地の研究者等との人的ネットワークを形成することの2点でした。私は、インドにおける教授言語や言語教育に関心をもって研究をすすめており、それに関する文献および資料を現地の大学図書館等で収集しました。これらを調査することで、日本国内における文献調査やオンラインでの調査のみでは明らかにすることができなかったことを踏まえて、今後の研究を進めることができると考えています。また、研究所や大学を訪問することを通して、現地の研究者との面談の機会を得ました。そこでは、インドの教授言語や言語教育に関する政策、状況について学ぶとともに、言語に対する考え方や連邦政府と各州政府の方針の違い等について議論することができました。現地の学生と交流することもでき、日本に帰国後もオンライン上で交流を続けています。本渡航で得た人的ネットワークを生かし、今後も積極的に現地での調査、研究を実施していきたいと考えています。



02 教育学研究科
教育学環専攻 修士課程2年

小島 美月

計画名 インド・カルナータカ州における文献収集およびフィールド調査
渡航国 インド





03 法学研究科
法政理論専攻 博士後期課程3年
ラモス マノン

計画名 戦間期の日仏の内閣制度と運用をめぐる比較史：
フランス側の調査
渡航国 フランス



政治機構の変遷をグローバル・ヒストリーの方法で再考する ——フランス側の史料調査

私は修士課程の頃から、比較史の手法を採用した研究を行い、できうる限り同様な種類かつ同量の日仏両国の史料を分析することが望ましいと考えてきました。今回の調査では、第三共和政フランスの総理大臣、国务大臣、内閣書記官長などを歴任した人物の史料収集を優先的な課題としました。まずはフランス国立文書館にて、Paul Painlevéのような重要な政治家の個人文書と、ナント市の外務省文書館に所蔵されている在日フランス大使館の史料を調査しました。ソルボンヌ大学の図書館も通い、日本で閲覧できない先行研究、回想録、バイオグラフィーを読書しました。最後に、戦間期フランスの外交史の専門家であるGuieu先生と、20世紀の財務省史を研究されているDescamps先生と研究面談を行い、貴重なアドバイスを頂きました。博士論文の執筆と学術論文の投稿をふくめ、今後の課題は今回収集してきた史料を利用しながら1920年代の内閣制度を分析することです。また、Guieu先生にご教示していただいた史料の収集と、EPHEにてのDescamps先生の下での中長期的な留学も考えております。

大学院教育支援機構 (DoGS) 海外渡航助成金は、世界を舞台に研究を深め新たな知見を探求する機会を提供し、あなたの未来を切り開く鍵となります。あなたも海外渡航助成金を活用し、世界との繋がりを築き、自らの研究の可能性を広げ、未来への第一歩を踏み出しましょう！

エチオピアで感じる大地の鼓動 —— 海洋底拡大現象の探求 ——

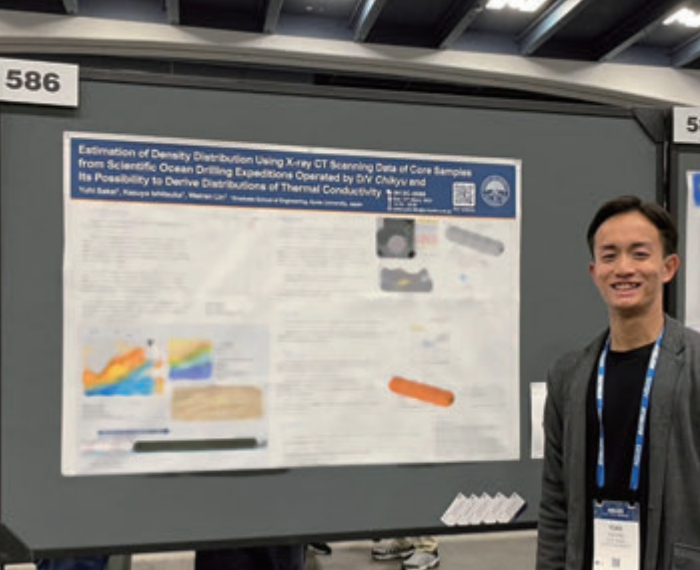
私は、プレート拡大境界の三重重合点に位置するエチオピア・アフール凹地にて、海洋底拡大現象を研究するグループに所属しています。これまでの研究を通して、対象領域が一般的な海洋底拡大場と比較して非常に複雑なプロセスを経て形成されたことが分かってきました。そこで今回、形成プロセスへの理解を更に推し進めるべく、広域かつ面的なデータ取得を目的として、空中磁気探査(無人飛行機にセンサーを搭載して磁場を計測する探査)を実施する運びとなりました。私は本助成金の支援を受けて本調査に参加し、センサーの取り付けやデータチェック、地質巡検等を行いました。気温は40度を超え、時に砂嵐に見舞われる過酷なコンディションでしたが、クオリティの高いデータを取得することができました。今後は得られたデータを解析して3次元モデリングを行い、別途サンプリングされた岩石の解析結果と比較することで、海洋底拡大現象の更なる解明を目指していきます。



04 理学研究科
地球惑星科学専攻 修士課程2年
伊藤 良介

計画名 エチオピア・アフール凹地、海洋底拡大軸域での
航空磁気測量
渡航国 エチオピア連邦民主共和国





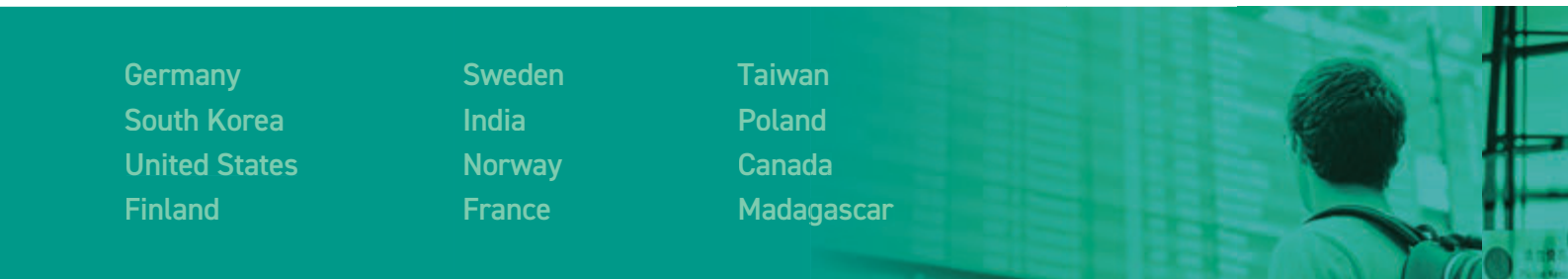
05 工学研究科
都市社会工学専攻 修士課程2年
酒井 雄飛

計画名 テキサス大学訪問およびアメリカ地球物理学連合大会での研究発表
渡航国 アメリカ合衆国



地球掘削科学の最前線への大きな一歩—博士後期課程での国際共同研究に向けて

私は、地球科学掘削で得られた岩石試料の画像解析・数値計算に基づいた物性推定の研究を行っており、博士後期課程では巨大地震のメカニズム理解・気候変動が極域の地殻変形に及ぼす影響の解明といった目標に向けて、より高度な実験・解析を行う計画を立てています。そこで、進学後の共同研究を見据えて修士2年の冬に11日間の日程でアメリカに渡航しました。同分野で実績のあるテキサス大学オースティン校の2つの研究室の訪問、およびサンフランシスコでのアメリカ地球物理学連合大会への参加を経て、ディスカッション・ポスター発表・食事会などで各国の学生・研究者とつながりを得ることができました。特に、博士後期課程で参画する国際深海科学掘削計画 (IODP) のプロジェクトでは、絶海の掘削船に2カ月間籠りワンチームとなって科学目標の達成を目指すため、事前に対面してコミュニケーションすることは大変重要でした。本助成金は、直接的な研究成果の創出だけでなくこうした今後の研究の起爆剤となるような訪問渡航にも活用できるため、修士課程の皆さんも早いうちから積極的に渡航を計画してみてください。



- | | | |
|---------------|--------|------------|
| Germany | Sweden | Taiwan |
| South Korea | India | Poland |
| United States | Norway | Canada |
| Finland | France | Madagascar |

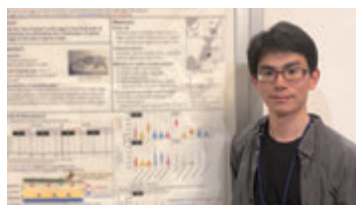
新しい視点と知見を求めて — 世界各国のウミガメ研究者との交流 —

私はウミガメの卵が捕食者の餌としてどれほど寄与しているのか、そして産卵地である砂浜の食物網にどのような影響を及ぼしているのかを研究しています。この研究について海外の研究者と広く議論を行うために、タイで開催されたInternational Sea Turtle Symposiumというウミガメ研究の国際会議でポスター発表を行いました。また、将来的に海外調査を行うための情報収集を目的として、タイのウミガメ研究施設を訪問しました。ポスター発表では多くの研究者と議論を行い、私の研究を遂行・発展させるうえで重要となるようなコメントもいただきました。学会後に訪問した研究施設では、タイで行われているウミガメの保全活動や研究内容について知ることができました。また、タイではウミガメ卵の捕食者に関する研究はほとんど行われていないこともわかりました。今回の渡航全体を通じて多くの研究者と交流することができました。将来、世界的に活躍する研究者となるためにも、今回構築した人脈を大切にしながら、私自身の研究を発展させていきたいと思えます。



06 農学研究科
応用生物科学専攻 修士課程2年
田嶋 宏隆

計画名 国際ウミガメ会議への参加と調査地選定のための予備調査
渡航国 タイ





07 人間・環境学研究科
共生文明学専攻 修士課程2年

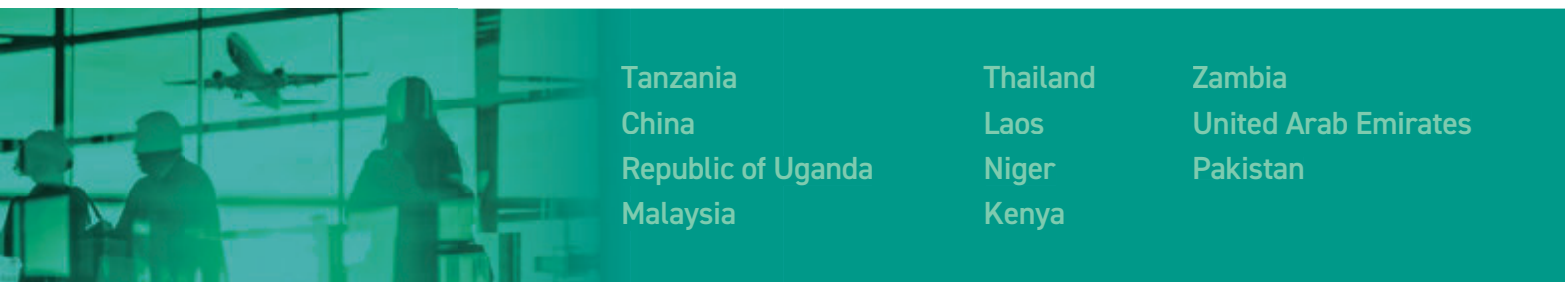
続木 梨愛

計画名 ラオスの養蜂の技術実践と家畜化をめぐる人類学的研究の予備調査
渡航国 ラオス



ラオスにおける養蜂の変容から人間と動物／自然の共生に向けた新たな視座を模索する

私は修士論文では日本国内の養蜂について文化人類学的な立場から研究していましたが、今回はラオス・シェンクワン県にて「養蜂の技術実践と家畜化をめぐる人類学的研究：ラオスにおける国際開発援助の事例から」と題する博士課程研究の予備調査を行うために渡航しました。この研究を通して、養蜂の実践を技術・道具の変容への着目から考察することで、人間と動物／自然の共生に向けた新たな視座を提示することを目指しています。本滞在では具体的な調査フィールドの検討や、養蜂を行っている10世帯と現地の群農林水産課の養蜂担当者への聞き取りを実施しました。その結果、ラオスの養蜂と日本の養蜂との接続や、調査地の人々の森林との独特な関係における養蜂の位置付けなどを明らかにすることに加え、今後の調査を進めるために十分な情報収集と関連人物との関係構築を行うことができました。今回の調査で得た情報をもとに今後の本調査の計画を立て直し、博士論文執筆に向けた調査を続けていきたいです。



Tanzania
China
Republic of Uganda
Malaysia

Thailand
Laos
Niger
Kenya

Zambia
United Arab Emirates
Pakistan

これってジェンダー格差?数字ではわからない夫婦の関係性

コンゴ盆地西端に広がる熱帯地域には狩猟採集民のバカという人々が暮らしています。彼らは平等主義社会を持ち、集団全体の調和を好むといわれていますが、男女間の関係性を調査するために、夫婦の日常生活に密着しました。その結果、女性は森や畑での生業を行い、休憩時間は少なく、家庭での家事・育児等への従事時間は男性と比べ著しく増えています。また物資や現金へのアクセスも限られています。しかしながら、インタビューでは固定化されたジェンダー像や夫婦のあり方が希薄で、平等主義に関連した「人々と食べ物を分け与えること」、「個人の性格の違いを認め、共生すること」に重きを置いているようでした。そして、男女ともに選択等の自律性が尊重され、性的役割に関わらず、必要に応じて何でもこなすことも彼らの特徴です。今回、時間、活動内容、距離、食事量、重さを徹底的に測定しましたが、そこからは見えてこない質的データの重要性を学ぶとともに、グローバルスタンダードの筋書きとは異なる男女の在り方を、可視化できるよう研究を続けていきたいです。



08 アジア・アフリカ地域研究研究科
アフリカ地域研究専攻 博士課程(5年一貫制)4年

小山 祐実

計画名 変わりゆく熱帯林の狩猟採集民女性と夫婦のあり方—日常的事象の分析から—
渡航国 カメルーン共和国





<https://www.kugd.k.kyoto-u.ac.jp/office/#p03>

申請期間や応募資格等の詳細は、大学院教育支援機構のホームページをご覧ください。

